

チャールズ・アイゼンスタイン

酒井泰幸 訳

新たな物語
気候

CLIMATE
A NEW STORY

野草社



Climate: A New Story
by Charles Eisenstein

Copyright © 2018 by Charles Eisenstein
Japanese translation rights arranged with North Atlantic Books
through Japan UNI Agency, Inc.

目次

プロローグ 迷宮 10

第1章 存在の危機 14

失われた真実 14

「彼ら」の正体 23

戦い 32

第2章

気候原理主義を超えて 44

他のことは関係ない？ 44

炭素還元主義のあべこべな結末 50

社会の気候 61

原因への突進 66

あらゆる原因の母 72

コミットメントが息づく場所 80

第3章

気候論争のグラデーションとその向こう側 85

私が付くのはどちら側？ 85

懐疑論の世界を訪れる 95

世界の終わり 108

科学という制度 114

間違った論争 121

第4章

水のパラダイム 130

違うレンズを通して 130

森林と樹木 133

ガイアの器官 142

気候変動の五千年 154

第5章

炭素 生態系の視点 161

炭素、土壌、生命 161

排出量という強迫観念 170

地球工学技術の妄想 177

数量というカルト宗教 185

第6章

悪魔との取引 198

地球温暖化物語の害 198

受動性の原因 204

なぜ私の息子を愛すべきなのか？ 216

自然の売買 221

自然の権利 228

第7章 革命は愛だ 235

すべては一頭のサイの中に 235

コンクリートの世界 244

選択の前提 256

第8章 再生 267

土を癒す 267

なぜ再生型農業は主流にならないのか？ 273

飢えた地球を食べさせる 279

水を癒す 286

人々と地球は互いを必要としている
野生を世話する
292
294

第9章 エネルギ―、人口、進歩 304

力のパラダイム 304

進歩の意味 310

豊かさへのトランジション 319

人口 324

第10章 お金と負債 334

椅子取りゲーム 334

成長の命令 341

開発と負債 348

偽善 353

エコロジー経済の諸要素 357

第11章

心の営み

370

我らは科学を信ずる

370

大地に感覚があると知っていたら

382

大地の力

393

現実を生き返らせる

403

第12章

生きている世界への架け橋

411

参考文献

422

訳者あとがき

438

訳者あとがき

本書の原書は二〇一八年に米国で出版されたのですが、この邦訳を世に問う二〇二五年までに、地球を覆う危機はその度合いをいっそう深めたように見えます。

二〇二五年の夏は史上最高の気温を更新し、梅雨と夏の区別が曖昧になって線状降水帯による大雨災害が頻発するようになり、気候変動が身体的・感情的な実感を伴うようになりました。地球の気候と社会の気候は呼応し合っているのだと、著者は主張します。

訳者がチャールズ・アイゼンスタインの著作と出会ったのは『聖なる経済学 (Sacred Economics)』(二〇一一年)でした。現在のお金のシステムがなぜ自然を破壊し人々を苦しめるのか。借金が必ず伴う現在の金融システムの問題を暴き出し、それを乗り越えていくギフト(贈与)経済を提唱しています。たたみ掛けるような語り口に引き込まれ、英語版を一気に読み通してしまいました。そこに語られていたのは本書とも共通するテーマである現代文明の世界観で、著者はそれを「分断の物語」と呼びます。世界の構成員は個別ばらばらに分断された自分本位な人々。世界には真空

の宇宙に浮かぶ原子の塊があるだけで、働くのは無個性な物理法則だけ。世界は自分とは別のもの、したがって何をしようと自分の勝手。

本書では、この「分断の物語」が現代文明のあり方を規定し地球生態系を破壊する様子をいつそう鮮やかに描き出します。『気候』というタイトルですが、「脱炭素社会」を説く本ではありません。地球上の生命にとって最大の脅威は化石燃料からの排出ガスではなく、森林、土壌、湿地、海洋生態系の破壊です。このように大きな問題を「炭素」という一つの尺度に落とし込み、これを敵として戦うことが問題なのです。戦いに勝ったところで真の解決にはなりません。何かにつけ敵や原因を見つけ出して戦いを挑む習慣のせいで、地球温暖化をめぐる議論も脅威論者から否定論者までさまざまな立場に分裂してしまいました。これは本当の問題を見えなくします。分断された議論で本当に重要なのは、両側とも疑わない暗黙の前提です。もうすぐ温暖化で文明が崩壊すると主張する人も、温暖化は腐敗した科学者がでっち上げた嘘だと主張する人も、現代文明のあり方そのものを疑うことはありません。

地球温暖化よりも重要なのは水循環と炭素循環が壊されていることです。太陽エネルギーが地球を通り抜けて暗黒の宇宙空間に落ちていく、その大きな流れが水循環と炭素循環を動かし、生命生態系を維持しているというのは、エントロピー論で語られる地球観です。地球に生命が存在できる条件が保たれているのは、地球全体があたかも一つの生命体のように振る舞い、体温や体液濃度を調整するように気温や海水塩分濃度を調整していると見るのが、ガイア論です。気候変

動は身体の器官を冒されたガイアの病であり、生態系荒廃の症状なのです。極端化する気象こそが病の症状であって、温暖化のせいで気候が極端化するものではありません。人為的な二酸化炭素の排出による温暖化が本当であろうが間違いであろうが、生態系が癒されれば副産物として気候は正常化します。著者は、再生型農業などで人々と生態系がどのような関係を結ぶことができるのかをさまざまな例を引いて紹介し、成長至上主義が組み込まれた経済システムの誤りを正して生態系の癒しを可能にするための方法を提示します。

知識の不完全さを認めて真実を探究する科学本来の謙虚さを著者は支持します。しかし権威となった科学は組織宗教にそっくりで、科学制度の権威に潜む傲慢さを著者は照らし出します。科学に根深く組み込まれている「還元主義（reductionism）」は複雑な世界を単純な尺度に落とし込む（reduce する、つまり矮小化する）のです。これは世界を数値化によって理解し我が物にできるという自惚れであり、森林を木材の体積やカロリーだけで評価してバイオ燃料に落とし込む（貶める）ような行為を必然的に招きます。数値化の裏には必ず見落としや無視されるものがあり、新たなテクノロジーは新たな問題を生みます。

現代文明が何に基づいてここまでの破壊行為を行ってきたかを振り返ると、理性だけでは問題が解決できそうにないことがわかります。文明を規定する物語の書き替えが必要なのです。私たちが直感として持っている、この世界のありとあらゆるものは生きているという世界観に、実は非常に大きな意味のあることを、著者は一つひとつ解き明かし、宗教的とかスピリチュアルと括

られ主流の議論から無視されてきた領域へと橋渡しします。この世界のあらゆるもの、動植物はもとより山や川や岩や水にまで主体性がある、つまり人格のようなものがあり意思さえ持つていると認めて尊重し、その神聖さを取り戻すことが、生態系の癒しには必要なのです。

著者のメッセージの中でひとときわ光を放つのは、出口なしに見える現在の危機的状況が、人類が大人になるための通過点にある試練、つまり通過儀礼だというものです。地球生態系から与えられるものは何でも奪い取り、やりたい放題やつてきた現代文明は、実は分別を知らない子どもだったのです。大人になるためには、危機を通過しなければなりません。通り抜けるのは不可能なようにも見えるのは、それが本物の通過儀礼だからです。これを持ち越えた先に待っている成熟した文明の姿は、土着の文化や、民間療法や自然農のようにオルタナティブとかホリスティックと呼ばれるものの中に垣間見るような、新しくも古来の生き方です。今、人類に求められているのは、インターレイング分断から脱却して「相互共存の物語」に基づいた文明に移行することです。インターレイング相互共存の世界観では、すべてのものはすべてのものの一部で、他のものに起きたことは何らかの形で自分にも起きます。人間の心身の健康、社会の風潮、大気的气候は、お互い密接に関係しているのです。

気候変動が人類に投げかける問いは「あなたたちはどんな世界に生きたいと望むのか？」というものです。現代文明の持続可能性をどうすれば達成できるかではなく、私たちが持続させたいものは何なのか。何千年にもわたり一步一步進んできたように、自然を人工物で置き換え、人間

にとって利用価値のあるものだけを残した「コンクリートの世界」を目指すのでしょうか。現在のシステムがあらゆるものを破壊し殺す理由は、それが世界を死んだ物と見ることから出発しているからです。私たちが環境保護を切望する理由は、損得勘定ではなく愛するものを失った悲しみです。人間以外の物質世界に愛すべき命などないと断定することで、私たちは自然界と物質世界を愛の対象から外してしまいます。あらゆる生き物を利用価値ではなくそれ自身として愛することこそが 필요한のです。私たちは美しいものと愛に落ち、愛するものに美を見いだします。もっと美しい未来が存在するよと招く直感に身を任せるなら、はるか遠くの発電所で放出される二酸化炭素や五〇年先の平均気温などではなく、私たちが今生きているこの場所に傷つきながらも残っている生き物たちを、少しずつでも癒すことから始めるのです。最終章で著者が示す一八項目の提案の最後に、農業使用からの脱却と社会の非武装化を挙げています。これらは、自然に対する戦いと人々に対する戦いをともに放棄するという、深い不戦のメッセージです。

*

振り返ってみると、私の生い立ちから野草社との出会いを経てこの本を世に出せるようになるまで、何かに導かれるように人生を歩んできたと感じます。

愛知県の農家に生まれ、大学は工学部を出ましたが、卒業前年の一九八六年に起きたチェルノブイリ原発事故とスペースシャトル・チャレンジャー爆発事故という、テクノロジーの失敗を見

て技術者として就職しました。一九九〇年に環境保護の国際イベントであるアースデイが初めて日本で行われた背景には、まさに原発事故の深刻さが人々に浸透したことがありました。私は名古屋のアースデイに出展者の一人として参加しましたが、そのとき初めて人為的二酸化炭素が地球温暖化を招くという話を聞きました。

アースデイで知り合った人々を通じて、私は奈良県桜井市で自然農を実践していた川口由一よしかずさんの田んぼの見学会に参加するようになりました。川口さんの活動を雑誌『80年代』で紹介し、著書『妙なる畑に立ちて』を出版していたのが野草社で、当時の見学会は野草社の石垣雅設まさのぶさんによって運営されていました。私が幼かった頃、父は米から野菜までさまざまなものを作る農家でしたが、だんだんと梨の果樹園という単一作物栽培に転換していきました。農薬を大量に使う梨栽培を横目に見ながら、これが良いことであるはずがないという直感を子どもの頃から抱いていましたので、川口さんの自然農には理想を見た思いでした。野草社が主催していた野草塾にも二度参加し、自然農とスピリチュアルな世界との関わりに触れました。理系頭の私にも、環境破壊の根源には自然に対する畏敬の念を失ったことがあるのは理解できました。

チェルノブイリ事故の実相を伝える写真展の手伝いをしたり、能登半島の珠洲すず原発反対運動に足を運ぶ一方で、父の田んぼの一角を借りて自然農の実験をしました。が、二年やっても収穫はほとんどありませんでした。父は「自然農はものにならん」という確信を強めただけでした。その後、会社を休職してJICAの青年海外協力隊に参加してバン格拉デシュに赴任し、次いで環境

問題を学びにアメリカに留学しましたが、それからしばらく自然農への関心から離れていました。復職してハイブリッド車の技術開発に関わりましたが、結局は従来車よりも大量の鉱物資源が必要で、資源効率的に見て改善にならないことに気づきました。そこへ福島原発震災が襲い、憂えていた事態がとうとう日本で起きてしまったショックから血の気が引く思いでした。政府は放射能の害について「当面は問題ない」と言い続けました。信用できる情報を求めている私は、食品放射能の市民測定所に参加し、また海外発の原発事故関連情報を日本語訳する活動に参加しました。

私は会社を辞める方向へ舵を切りましたが、その頃に出会ったパーマカルチャー、特にフォレストガーデンの考え方は、自然農を果樹園に応用したものと私には見えました。フォレストガーデンを実践できる場を求めて私が移住した和歌山県那智勝浦町の色川地区は、有機農や環境保護を志向する人が多く、移住者受け入れの先進地といわれる地域です。その頃、那智勝浦町は環境省の「地域循環共生圏」に応募し採択されたので、町民参加のワークショップが開催されていました。資源の地域循環を通じて環境保護を目指すところですが、地域循環とは地域にお金が回ることだと解釈され、議論が矮小化されていくのを見て私は落胆しました。哲学のない環境保護運動は簡単にお金の論理に絡め取られてしまいます。ちょうどその頃に読んでいたチャールズ・アイゼンスタインの著作が、私の辿ってきた人生と強く共鳴したので、二年をかけて『気候』を翻訳し、色川の仲間たちと読書会を続けてきました。

コロナ禍の期間を通じて、私はチャールズの著作の翻訳をさらに進めました。チャールズがこれまでで執筆した書籍に通底するテーマである「分断の物語」は、コロナ禍という社会現象を通じて目に見える形で展開しました。チャールズの本格的な著作の中で最大のものは二〇〇七年に発表された『人類の上昇 (The Ascent of Humanity)』で、ここには文明全体に対するチャールズの主張が込められています。『気候』にちりばめられた「科学技術・技術 (テクノロジー)」や「制御・支配 (コントロール)」「精霊・魂 (スピリット)」など数々のキーワードは、『人類の上昇』を読むことでいっそう鮮やかにその輪郭が見えてきます。

本書を日本で出版するにあたって、私にチャールズ・アイゼンスタインの著作を初めて紹介くださった、フォレストガーデンの師でもあるディオン・ワークマンさんに心からお礼を申し上げます。

二〇二五年一〇月一五日

酒井泰幸

著者

チャールズ・アイゼンスタイン (Charles Eisenstein)

一九六七年生まれ。

文明、意識、貨幣、人間文化の進化というテーマに注目する講演家であり文筆家。

彼の短編動画やエッセイはネット上で急速に拡散し、既存の分野にとらわれない社会哲学者、対抗文化（カウンターカルチャー）の知識人として知られる。

一九八九年にイエール大学を卒業し数学と哲学の学位を取得、その後一〇年間を中国語・英語の翻訳者として過ごす。

著書に『The More Beautiful World Our Hearts Know Is Possible（心の中にある実現可能なより美しい世界）』（二〇一三年）『Sacred Economics（聖なる経済学）』（二〇一一年）『The Ascent of Humanity（人類の上昇）』（二〇〇七年）がある。

訳者

酒井泰幸（さかいやすゆき）

一九六三年生まれ。

東京工業大学（現東京科学大学）機械工学科卒業。日本電装株式会社（現株式会社デンソー）に勤務のかたわら、JICA青年海外協力隊バングラデシ派遣、米レンセラー工科大学 Ecological Economics, Values & Policy 修士課程修了。二〇一四年株式会社デンソーを退職。二〇一九年に和歌山県那智勝浦町へ移住。

気 候 新たなる物語

2025 年 12 月 10 日 第 1 版第 1 刷発行

著 者 チャールズ・アイゼンスタイン
訳 者 酒井泰幸
発行者 石垣雅設
発行所 野草社
 東京都文京区湯島 1-2-5 聖堂前ビル
 tel 03-5296-9624 fax 03-5296-9621
 静岡県袋井市可睡の杜 4-1
 tel 0538-48-7351 fax 0538-48-7353
発売元 新泉社
 東京都文京区湯島 1-2-5 聖堂前ビル
 tel 03-5296-9620 fax 03-5296-9621
印刷・製本 萩原印刷

© Sakai Yasuyuki, 2025

ISBN978-4-7877-2581-3 C0036

本書の無断転載を禁じます。本書の無断複製（コピー、スキャン、デジタル化等）ならびに無断複製物の譲渡および配信は、著作権上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等に依頼して複製する行為は、たとえ個人や家庭内での利用であっても一切認められていません。

ブックデザイン 菊地幸子

妙なる畑に立ちて

川口由一 著

● A5判上製／三二八頁／二八〇〇円十税

耕さず、肥料は施さず、農薬除草剤は用いず、草も虫も敵としない、生命の営みに任せた農のあり方を紹介。

アニミズムという希望 講演録 琉球大学の五日間

山尾三省 著

● 四六判／四一六頁／二〇〇〇円十税

詩人の言葉によって再び生命を与えられた新しいアニミズムは、私達が時代を切りひらいてゆく思想である。

ブッダの〈気づき〉の瞑想

ティク・ナット・ハン 著 山端法玄・島田啓介 訳

● 四六判上製／二八〇頁／一八〇〇円十税

瞑想の基本となる経典を全訳し、ブッダの瞑想の智慧が現代の私たちの生活にどう生かせるかを丁寧に説く。

ブッダの〈呼吸〉の瞑想

ティク・ナット・ハン 著 島田啓介 訳

● 四六判上製／二七二頁／一八〇〇円十税

呼吸は個我意識を超えた大きな流れ、広がり、深みに触れる鍵。マインドフルネスを生きるための実践法。